

27PB-am125

生薬キクカの基原植物シマカンギクの試験栽培

○石川 寛¹, 福田 達男¹, 小林 義典¹, 寶示戸 雅之², 小野 泰², 小路 晶子², 及川 哲郎³
(¹北里大薬, ²北里大獣, ³北里大東洋医学総研)

【目的】北里大学薬学部附属薬用植物園では、東洋医学総合研究所、獣医学部フィールドサイエンスセンター八雲牧場との共同研究として、生薬基原植物の試験栽培に取り組んでいる。本研究は安全で高品質な生薬の生産方法を確立することを目標に、条件の異なる3つの圃場で同じ植物を栽培し、生育状況や収穫量、生産した生薬の品質などを比較することを目的としている。ここでは生薬キクカの基原植物であるシマカンギク *Chrysanthemum indicum* L. の試験栽培について現状を報告する。

【材料と方法】北里大学で栽培しているシマカンギクから株分けで苗を調整し、2014年4月から5月に薬用植物園研究圃場（神奈川県相模原市）、獣医学部八雲牧場（北海道二世郡八雲町）、および同町内の八雲産業の圃場に定植した。圃場ごとに10株の基準植物を定めて、週1回、草丈や茎の太さなどを測定するとともに、圃場に設置したセンサーで気温、降水量、土壌温度などの環境のデータも記録した。10月下旬に薬用部分である頭花（つぼみ）を収穫し、数や収量を記録した。

【結果と考察】シマカンギクの成長量を3圃場間で比較した結果、6月中旬以降は徐々に差が開き、草丈に関しては8月下旬の時点で相模原が八雲産業の約1.7倍となった。八雲牧場は八雲産業の1.1倍程度で、わずかに大きかった。3圃場の環境のデータで最も顕著に異なるのは気温であり、成長量の差は主に有効積算温度の差を反映していると思われた。3地点で開花時期に大きな差はなく、いずれも10月中旬に最初の開花を確認した。10月下旬には頭花を収穫し、葉や茎なども分析用にサンプリングした。今後、収量の比較や局方試験、その他の分析をおこなう。